

中動態と〈差異化—媒介〉のはたらき

森田 亜紀

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2002年9月30日 受理)

はじめに

本論は、中動態 (middle voice) という言語の範疇を手掛りにして、芸術体験を考察しようとする試みの一部をなすものである¹⁾。

中動態は、能動態 (active voice)、受動態 (passive voice) とならぶ、インド＝ヨーロッパ系言語の態の一つである。古代のギリシア語やラテン語、サンスクリット語などに明確なかたちで見られるというが、われわれの時代では、英語もフランス語もドイツ語も態と言えば能動態と受動態だけで、中動態は一般になじみがなく、いわば忘れられた態となっている。この忘れられた態、能動でも受動でもない第三の態が、既存の思考の枠組では捉えにくいものごとを別の角度から理解する助けにならないか、というのが本論も含めた一連の作業の目論見である²⁾。

しかし能動でも受動でもない中動とはどういうことなのか。言語学者たちはさまざまなかたちで中動態の特徴を挙げ、その本質を言い当てようとする。多くの論者は中動態の特徴として、subject affectednessをまず挙げる。すなわち能動態の主語が専ら動作主 (agent) であって、動詞の表わす過程から影響を受けないのに対し、中動態の主語は、主語でありながら、動詞の表わす過程のなかで何らかの影響を被る、ということである³⁾。

バンヴェニストは中動態のこのような特徴を踏まえ、「能動態の動詞が、主語から発し主語の外で実行される過程を表わすのに対し、中動態では、動詞の表わす過程は主語を座とし、主語がその過程の内にある」⁴⁾と説明した。以前われわれはこれを「中動態において、主語は出来事に巻き込まれてあり、もとの状態と異なった状態になる」とパラフレーズした⁵⁾。とすれば、能動態では、出来事の源である動作主が、出来事と別に出来事に先立ってなければならないが、中動態では、そういう本来の意味での動作主が、かならずしもなくてよいことになる。実際、中動態の本質を、〈absence of agency動作主のないこと〉そして〈spontaneityものごとがひとりで起こること〉に見る論者もある⁶⁾。さらにすすめば、ひとりで起こる出来事のなかから何かあるものがおのずと生じてくる、というようなことも、中動態で表わされうる「根源的」な事態として考えることができるかもしれない。

中動態は、能動態や受動態とは違って、自己同一的な項と項との関係でものごとを捉えない。中動態はむしろ、名詞で表わされることになる項が生成し変化する過程を表わすのに適していると考えられる。能動態と中動態の対立は、〈する〉と〈なる〉の対立として考えることもできるだろう⁷⁾。しかし中動は〈なる〉である、〈おのずと生じることである〉と言うだけでは、

おそらく中動態のもつ射程を切り縮めることになる。というのも中動態は、二つの異質で対立するものが差異化しつつ媒介される事態の表現にも、関わるように思われるからである。本論では特にその点を検討してみたい。

1. ケマーの中動態理解から

中動態の本質をspontaneityの方向に見い出そうという考え方とは別に、中動態を再帰(reflexive)の延長線上で理解しようとする考え方もある⁹⁾。

アメリカの言語学者ケマー (S.Kemmer) は、「(自分の) 体を洗う」、「(自分で) 服を着る」といった身だしなみの動作をはじめ、移動を伴わない運動、姿勢の変化といった身体動作が、多くの言語において中動態で表現されることに着目し、これを再帰と比較することで中動態を考察していく⁹⁾。ケマーは、他動詞の〈主語/目的語 (主体/対象)〉を思わせる〈Initiator (動作を発するもの) /Endpoint (動作が達するもの)〉という用語を使いながら再帰と中動を比較する。両者は、InitiatorとEndpointが同一実体であるという共通点をもつが、InitiatorとEndpointの区別可能性 (distinguishability) に違いがある。再帰は、たとえば「自分で自分をたたく」において、たたく身体部分とたたかれる身体部分がはっきり区別されるように、InitiatorとEndpointが同一実体内で別々に見てとられる。これに対し中動では、同一実体内でInitiatorとEndpointの区別がはっきりしない。たとえば「服を着る」で、着せる役割と着せられる役割は1つの身体の中で区別できない。InitiatorとEndpointという意味論的役割が中動では「ただ1つの全体としての実体」に帰されるとケマーは言う¹⁰⁾。

ケマーは、InitiatorとEndpointの「相対的区別可能性 (relative distinguishability)」の程度をもとに、他動詞の能動、再帰、中動、自動詞の能動の違いを説明しようとする。他動詞の能動ではInitiatorとEndpointが別々の実体である。自動詞の能動にあるのはInitiatorだけでEndpointがない。動詞の表わす出来事に参与するもの (participant) は、他動詞の能動では2者、自動詞の能動では1者ということになる。参与するものが2者 (他動詞の能動) と1者 (自動詞の能動) というこの両極のあいだ、2と1のあいだに再帰と中動がある。再帰はいわば自己自身を対象とする他動詞の能動と考えられて他動詞の2寄り、中動はInitiatorとEndpointの区別可能性が極めて低いため自動詞の1寄りに、各々位置するとケマーは整理する¹¹⁾。

われわれがここで注目したいのは、中動態と自動詞の能動態との違いである。自動詞の能動にはInitiatorしかないため、participantが1であるとされる。これは、出来事から主語が影響を被らないということとイコールであるが、この1は全き1、その内部や下部構造が問われない (変化が問題にされない)、いわば1つの単位ということになる (もちろん他動詞の能動の主語も、このような全き1とみなされるはずである)。しかし中動態の主語は、このような純粋な1ではない。ケマーは中動を再帰と比較する文脈において、InitiatorとEndpointが「ただ1つの全体としての実体」に帰されると言う一方、自動詞の能動と比較する文脈においては、この「1つ」のうちに「何らかの程度の内的複雑性」¹²⁾を指摘する。出来事を引き起こすこととそ

の影響を被ることと、出来事を引き起こすものとその影響を被るもの——ケマーは中動態の主語のうちに、相反し対立する2が、区別し難い1としてあるのを見る。

中動態のparticipantは、一方で1と言われるにしても、差異を含んだ1、その内部構造や変化が問題となる1ということになる。中動態では、1と2のあいだ、1である2、2である1が問題になるのではないか。このような角度から、中動態表現の用いられる事態や出来事を理解できないだろうか。

2. 見えるということの中動

カッシーラ (E.Cassirer) が表情体験を記述する文章には、広い意味で中動態とみなされるドイツ語の再帰動詞表現がしばしば用いられる¹³⁾。人を主語とし体験される表情を目的語とする他動詞の能動態表現、あるいはその反転である、表情を主語とした受動態表現は見あたらない。体験のなかで現われる何か、見えてくる何かが主語になり<sich offenbaren (現われる)>、<sich manifestieren (顕現する)>、<sich darstellen (示される)>、<sich geben (与えられる)>等と表現される。これは (日本語のニュアンスでいえば)、表情知覚が、主体が対象を<見る>体験ではなく、何かが<見える>体験だということを意味すると思われる。

言語学者たちは、知覚を表わす動詞の中動態を、中動態の用法のひとつとして挙げる。人を主語にし目的語をとる能動態表現とは別に、ドイツ語では<es hört sich gut an (よく聞こえる)>、英語では<it smells good (いい匂いがする)>というような人を主語にしない表現があり、これが中動態だということである¹⁴⁾。<聞く>に対する<聞こえる>、<〔花の〕匂いを嗅ぐ>に対する<〔花の〕匂いがする・〔花が〕匂う>——知覚体験の或る位相が中動態で表わされる。カッシーラが記述する表情体験は、このように中動態で表現される知覚体験の位相と、重ねて考えることができるだろう。

われわれがここでカッシーラの表情論を取り上げるのは、カッシーラが表情のうちに、1である2、2である1を見ているように思われるからである。

カッシーラにとって表情は、世界の形態化の始まりであって、どのような実体にも還元されない「根源的」な「現象」「あらわれ」である。表情はまた、最初のシンボル機能が見てとられるという意味においても「根源的」であるとされる。すなわち、表情においては「感性的なもの」と「意味」が一体化しているというのである。両者のあいだに「分離は全くない」「区別はない」「いかなる分裂も知らない」——カッシーラは表情の「単一性Einheitと単純性Einfachheit」を強調する。しかしそれがシンボル形式の始まりである以上、そこにはやはり「感性的なもの」と「意味」という「2つの契機の二重性」がある。カッシーラはこの「二重性」に「潜勢Potenz」ということばを使う。「差異として定立されていない差異」「内部対立をかかえているにもかかわらず、それまで具体的な単一Einheitであったもの」という言い方もしている¹⁵⁾。表情においても、1である2、2である1が問題となっている。表情もまた、1と2の微妙なあいだにある。表情体験はこのような意味で、中動態で表現されるのではないか。

<感性的なもの／意味>という対立を、カッシーラは<現われ／本質>、<個別的なもの／普遍的なもの>、<物的なもの／心的・精神的なもの>という対立にも展開する。(反省的に捉えれば)明確に区別され互いに対立する2つの契機が、表情という1つの現象において、差異化されつつ媒介されている——われわれは表情のうちにこのような差異化と媒介のはたらきを見ることができないだろうか。

表情体験は「見える」という体験である。見えるということにおいては、見えるものの向こうに、見えない何か、見えてしまわない何かがある。見えるものは、見えないものささまざまな見え、さまざまなあらわれとして見えてくる。見えない本体とそのあらわれということだろうか。個々のあらわれは本体の1面でしかないだろう。しかし本体そのものはあらわれを通じてしか与えられない。見えるもの—見えるということ—見えないもの。見えるということのうちに、見えるものと見えないものが、分離しつつ一つであるというようにして、生じてくる——それが表情なのだろう。そしてそのような出来事が中動態で表わされる。

3. ふるまうことの中動

哲学者坂部恵は、「ふるまい」という日本語をめぐる考察のなかで、「ふるまう」にはほぼ相当する西洋語の動詞が、ドイツ語でsich verhalten, 英語でbehave oneself, フランス語でse comporterと、いずれも再帰動詞のかたちをとることに注目している¹⁹⁾。われわれの立場からすればこの「再帰動詞」は中動であり、彼もこれを「ギリシア語の中動相」と重ねて考えている。彼がこの表現に注目するのは、それが「ふるまい」のもつ「受動的であると同時に能動的なく二重化的な構造」²⁰⁾を暗に示すからである。彼は、この「ふるまい」の二重構造が、開かれた動的な二重構造であって、ひとは「自由自在なふるまい」において、「いわば自己と他者との間、普遍的規範と個別的状況との間を想像力によって自由に往き来しながら、個別的状況に即し、個別的状況を超えつつ、ふるまう」²¹⁾と述べている。「ふるまう」ということのうちに、差異化と媒介のはたらきが見て取られるということだろう。われわれはここでも、中動態で表わされる事態が差異化と媒介に関わるのを見る。

坂部恵のとりあげるこのような事態を、中世以来の「ハビトゥス habitus」概念¹⁹⁾を援用して考察するのが、スコラ哲学を専門とする山内志朗である。彼は、ふるまいの自在さを保証するものとして、ハビトゥスを考える。例えば、むかし練習して自転車に乗れるようになった人は、たとえ30年ぶりであっても、自転車に造作なく乗ることができる。このようなことを可能にする能力、「身体化し慣習化した能力」²⁰⁾「現実的な作用ではなく、ある状況の中で作用・行為を行いうる能力」²¹⁾がハビトゥスである。繰り返しのよって学ばれ定着されたかたち、身についたかたちがあるからこそ、ひとは、いちいち意識せずとも状況に応じた個々の現実のふるまいができる——ハビトゥスとは、身体に沈澱するその潜在的な「かたち」である。ひとは、ハビトゥスという身体化された能力、身についた潜在的な「かたち」によって、他者や外的な事物と関わっている。ハビトゥスという身体に根づいたかたちを通して、悲しみや喜びを自分のも

のとしている。したがって「人間はハビトゥスによって世界を織り上げ、世界はハビトゥスを通して姿を現してくる」²⁹⁾ということにもなる。

山内志朗はハビトゥス (habitus) が, se habereという再帰動詞に由来し, それが「能動でもなく受動でもなく, その中間にある中動相」²⁹⁾を表わすと指摘している。彼はハビトゥスの「中動相的事態」を, 「能動と受動の中間に位置し」「自ずと現われる, 自然と湧き上がるという現象様式を有」²⁹⁾することとして理解する。しかしわれわれがここで重視したいのは, 彼がハビトゥスに, 媒介のはたらきを見てとることである。これもまた, 中動態と媒介との関係を示唆するものと思われるからである。

ハビトゥスは「かたち」といわれるが, それは目に見える現実の形ではない。目の前の個別のふるまいの形ではない。具体的な場面の中での, 現実の身体のひとつひとつの動きや姿勢の形ではない。それは物質的なもの, 個別的なもの, 現実的なもののはっきり目に見える形ではない。しかしそれは身体を座とする以上, 純粹に可能的なものでも, 純粹に普遍的なものでも, 純粹に精神的なものでも, もちろんない。ハビトゥスは, 「可能性と現実性の中間にある」とも「現実化しつつある可能性」²⁹⁾とも言われる。可能的なものや現実的なもの, 普遍と個体, 知性と感性, 精神的なものや物質的なもの…, 山内志朗はハビトゥスに, 様々な二元論的対立の「媒介」を見るのである。

彼は媒介について, 次のように述べている。「媒介には始点と終端に向かう二つの顔があり, その二つの顔を通してしか, 媒介は姿を現さない」「始点でも終点でもないが, 同時にそのいずれでもありうるものが媒介の本来の姿だ」「二つの顔が実は一つのものであること, いや一つのものの異なる現れであることが知られて初めて, 媒介は知られうるものとなろう」²⁹⁾。

ハビトゥスとは, 以下のように考えてよいだろう。例えば私がひとりの男性を大事にしようとして, その大事にしようという思いは, あるいは精神的なものであり, 個々の具体的な場面を越えた普遍的な意味のようなものであり, いまだ現実化されない可能的なものなのかもしれない。それを私は, 場面に応じた具体的な行為として, 相手に対するはたらきかけとして, 目に見える形にする。今ここに, 受肉させる。それは行為である限り, 目に見えひとに感じられるものである限り, 私の身体を通じてはじめて形になっているはずだ。目に見えないものを, そのような目に見えるままとまった形に具現する, 身についた潜在的な「かたち」——メルロ＝ポンティのことばでいえば身体図式, スタイルのような何かが, ハビトゥスなのだろう。私の抱く「思い」は, あくまで可能的なもので, 形もなく, それ自身は見えない²⁹⁾。「思い」は身体を通じ, 形をもった行為, 相手への具体的なはたらきかけ, ふるまいとなつてはじめて, それと知られる。実現され, それとしてあることになる。「思い」がなければふるまいという形はないが, 目に見えるその場その場の個別的なふるまいの形なくしては「思い」もないだろう。「思い」と「ふるまい」のあいだに, 両者をつなぐ潜在的な「かたち」がある。この「かたち」, ハビトゥスは, 身体を通じた具体的な・個別的なふるまいに見い出されるが, 同時にそれを越えた可能的なもの, 普遍的なものにも通じている。ハビトゥスは, このようなこととして理解で

きるだろう。

山内志朗が考察していくハビトゥスのあり方は、カッシーラの捉えた表情のあり方と極めて似ている。われわれはカッシーラの「表情」に、山内志朗のいう「媒介」と同様のはたらきを見ることができる。両者がともに中動態で表わされるのは、偶然とは思われない。このことは、われわれが1の節で言語学者ケマーの論から引き出した中動態の特徴、「中動態では、1と2のあいだ、1である2、2である1が問題になるのではないか」という点と重なってくる。重ね合わせて考えれば、中動態は、差異化と媒介に関わる出来事一般を表わす態であると、言うことができそうである。

4. 私であることの中動

言語学者たちはまた、中動態の用法のひとつとして、心的出来事の領域に関わる表現を挙げている。「こわがる」「怒る」「悲しむ」というような情動の動詞、また、「思う」「考える」というような認識の動詞にも、しばしば中動態が見られるというのだ。日本語のニュアンスでは、むしろ「こわい」「腹が立つ」「悲しい」、そして「…と思われる」「…と考えられる」なのかもしれない。

デカルト (Descartes) のコギトにおいて確かなものとされた「我思う」は、テキストではラテン語のvideor, もともとは中動態の「…と私には思われる」だと、精神病理学の長井真理は指摘している²⁸⁾。長井真理は、分裂病患者に「非対象的・非措定的な自己への関与の亢進」を見る。すなわち分裂病患者においては、自己を対象化しようとしなくても日常行動や思考活動においてその都度不本意に生じる自己意識、しかも自分自身の性質について何の内容規定ももたらさないような自己意識が、患者本人に意識されているというのである。通常の自己意識は、自分自身を対象化し、自分自身の性質について内容規定をもたすが、それとは別の「非対象的・非措定的」な自己意識である。長井真理はこのもうひとつの自己意識が、患者以外でも通常、意識されることなく生じていると考える。それは「非対象的・非措定的」である以上、本来は意識されない（だから患者がそれを意識することが、「病的」ということになる）。長井真理は、この非対象的・非措定的な「自己意識」をデカルトのコギトと重ね、それが中動態で表現されるということに注目する。

長井真理は、デカルト『省察』のテキストをたどり、デカルトが「私」の確実性に達したのは、彼の「疑う」という行為のなかに「疑われる私」という視点が生じたときだと判断する。「最終的に確実だとされた私は、単なる能動的主体としての私でも、単なる受動的客体としての私でもなく、疑うことが同時に疑われることでもあるような行為、単なる能動でも受動でもないような行為の容態に関わる限りでの「私」である²⁹⁾と彼女は述べ、このような「容態」を考える手掛りとして、中動態を持ち出してくる。そしてこの、いわば中動態で表わされるべき自己関与の容態を、「私には…と思われる」にも、分裂病患者において亢進している「非措定的・非対象的自己関与」にも、同様に見出す。このはたらきは、われわれの日常生活にお

いては気づかれないが、私や世界の確実さをつねに背後で支えており、その隠べい性は、私や世界の明証性と密接に関係する。

われわれはここに、「私であること」を支える中動態の自己関与を見ることができている。自己関与である以上、それは私と私との関わりであろうが、この私と私は、一方が主体であり一方が対象であるような別々のものではない。これは再帰ではない。ここに対象化はない。ここに2はない。しかし全き1もない。つまりそこには関わりを可能にする差異のようなものが生じていなければならない。「私であること」はそのような1と2のあいだで成り立っていることであり、だから中動態なのである。

私と私の差し向いではなく、自分自身を対象化するのではない自己との関わりは、現象学、特にフッサール (E. Husserl) の晩年の草稿に源をもつ探究においても、重要な問題として論じられている。現象学においては、反省の徹底化の中で、反省に先立つ反省の根拠が求められる。現象学者新田義弘によれば、現象学が先反省的根拠を求める次第は以下の通りである³⁰⁾。従来の反省は措定的反省であり、そこにおいて自我は、反省する自我と反省される自我に分裂している一方、分裂を通して反省する自我が反省される自我と同一の自我であることを確認する(われわれのことばで言えば、これは自分自身との再帰的な関わりということになる)。しかしこの同一性の確認は、時間の中で、つねに流れ去った自我をあとから覚認することでしかない。とすれば、自我の同一性は反省によってつくられるのではなく、反省に先立ってすでにあるのでなければならない。また反省という自我分裂に先立って、自我の分裂の可能性も成立していなければならない。すなわち、反省の根拠として、「分裂しつつ同一であるごとき自我の原初的在り方」³¹⁾が、反省に先立つ今だ主題化されない根源的事態として、要請されるというのである。現象学者ヘルト (K. Held) は、このような事態を、「先反省的な自己分離かつ合一 die praereflexive Selbstentzweigung und -einigung」³²⁾「分離されていること—のうちで—ひとつになつて—いること Eins-sein-im-Getrenntsein」³³⁾と表現している。われわれはここにもまた、差異化であり媒介であるはたらきを見出す。現象学は、長井真理のいう「非措定的・非対象的自己関与」と同じような事態を見出している。これもやはり、中動態の表わすべき事態であろう。心的領域の動詞にしばしば中動態が用いられるのは、精神病理学や現象学が見出すこのような事態と、暗に対応しているのではないか。

新田義弘は、このような根源的事態、「非対象的な自己感触」が、「遂行態」においてのみ生起しており、したがって反省による対象化をつねに逃れるということ指摘する³⁴⁾。そしてそこに「現われにはいってこないで、現われを成立させるために身を引くはたらき」³⁵⁾を見る。これは、長井真理のいう「非措定的・非対象的自己関与」が、それ自身は意識されず、しかも世界や「私」の確実さを支えていることと、同様の構造ではないだろうか。見えるものと、見えるものを見えるようにしている見えないもの—おそらくここにも、差異化と媒介のはたらき、中動態であらわされる事態があるのではないか³⁶⁾。

むすびにかえて 中動態とLebendigkeit

以上われわれは、中動態で表わされるいくつかの事態に、差異化であると同時に媒介であるようなはたらきや出来事を見てきた。中動態のこの側面は、「おのずと生じること」を表わすという側面と、無関係ではないだろう。その検討は別の機会にゆずりたい。

最後に注目しておきたいことは、本論でとりあげた中動態であらわされる事態が、いずれも「生き生きした (Lebendigkeit)」³⁷⁾ 出来事として経験されるということである。それは、それらの出来事の中動態を要求する特徴が、新田義弘のことばでいえば「遂行態」においてのみ、それと認められるということの意味する。あとから反省的に分析すれば矛盾を含むと言わざるをえないことが、ひとがそれを生きるただなかにおいて成立している。カッシーラによれば、ヤーコプ・グリム (Jakob Grimm) は「真の本来的な中動態は一般に、内的な魂や身体において生きいきと生起していることを表示するためにつくられた」と述べているという³⁸⁾。中動態に指摘されるこの特徴を、他の特徴と結びつけて考察することが必要であろう。われわれの中動態研究が、芸術体験の解明を目的とするうえからも、Lebendigkeitの検討は重要である。

註

- 1) 拙論「『述語的なもの』と芸術——メルロ＝ポンティの後期思想から——」芸術学芸術史論集 神戸大学文学部芸術学芸術史研究会1994, 「芸術における地平性・次元性と中動態」倉敷芸術科学大学紀要創刊号1996, 「中動態の射程」同第4号 1999, 「表情知覚の『根源性』をめぐって——カッシーラ, メルロ＝ポンティの表情論から——」同第5号 2000, 「自己の身体と中動態」同第6号 2001, 「表情知覚の中動態」文部省科学研究費 研究報告書『「感性の学」の新たな可能性——その意義と限界』2001
- 2) 現代思想の領域では、さまざまな論者が、既成の枠組, とりわけ西洋近代の枠組を再検討する文脈で、中動態に言及している。前掲拙論「中動態の射程」参照
- 3) Suzanne KEMMER, *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Co., 1993, Linda Joyce MANNEY, *Middle Voice in Modern Greek*, John Benjamins Publishing Company, 1998, M.H.KLAIMAN, 《Affectedness and control: a typology of voice systems》, Masayosi SHIBATANI ed., *Passive and Voice*, John Benjamins publishing Co., 1988, p.25-83
- 4) Emile BENVENIST, 《Actif et moyen dans le verbe》1950, *Problemes de Linguistique Generale*, Paris, Gallimard, 1966 所収
- 5) 拙論「中動態の射程」
- 6) Jan GONDA, 《Reflections on the Indo-European Medium I》, *Lingua* 9,1960, p.36-67, p.175-193
- 7) 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店 1981参照
- 8) 再帰と中動は「再帰中動態」とまとめて語られることも多い。フランス語の代名動詞やドイツ語の再帰動詞は、中動の意味を表わす場合もあるが、形の上では、主語自身を目的語にとる他動詞という再帰の姿をとっている。
- 9) KEMMER前掲書
- 10) 同書 p.66
- 11) 同書 p.73
- 12) 同書 p.72
- 13) E.CASSIRER, *Philosophie der symbolischen Formen III*, (1929),Darmstadt, 1964 (木田元・村岡晋一訳『シンボル形式の哲学』(三) 岩波文庫 1994)
- 14) この用例はKEMMER前掲書 p.136

- 15) CASSIRER前掲書 s.109-110 (訳書 p.191-192)
- 16) 坂部恵『ペルソナの詩学』岩波書店 1989 p.82
- 17) 同上
- 18) 同書 p.85
- 19) ハビトゥスとは、広い意味での習慣のことであるといわれる。ハビトゥス論の歴史については、稲垣良典『習慣の哲学』創文社 1981 参照。
- 20) 山内志朗『天使の記号学』岩波書店 2001 p.124
- 21) 同書 p.128
- 22) 同書 p.175
- 23) 同書 p.132
- 24) 同書 p.134
- 25) 同書 p.133
- 26) 同書 p.193
- 27) 厳密に言えば、ここで言語についての考察が必要である。「思い」に形を与え、見えるようにする「ことば」。もちろん「ことば」も広い意味では身体を通じた「ふるまい」のひとつである。しかし単なる「ふるまい」を越えているようにも思われる。言語についての考察は、後の大きな課題として残る。
- 28) 長井真理「分裂病患者の自己意識における「分裂病性」」『内省の構造』岩波書店 1991 所収 p.185-197
- 29) 同書 p.192
- 30) 新田義弘『現象学』岩波書店 1978 第6章, 同『世界と生命』青土社 2001 第7章
- 31) 新田義弘『現象学』p.187
- 32) Klaus HELD, *Lebendige Gegenwart*, Martinus Nijhoff, 1966, s.85 (邦訳『生き生きした現在』新田義弘訳 北斗出版 1997 p.118 ただし訳語は変えてある)
- 33) 同書s.81 (邦訳書p.111)
- 34) 新田義弘『現象学』p.190
- 35) 新田義弘『世界と生命』p.129
- 36) あくまで予想だが、新田義弘『世界と生命』の「媒体性の現象学」が考察しようとする事態は、中動態の圏域と重なるところがあるのではないだろうか。
- 37) *lebendig*というこの形容詞は、フッサールが先反省的な根源的事態を「生き生きした現在 *lebendig Gegenwart*」と呼んだばかりでなく、カッシーラが表情体験を記述する際にもしばしば用いられている。
- 38) E.CASSIRER, *Philosophie der symbolischen Formen I*, (1923),Darmstadt, 1953 p.224 (生松敬三・木田元訳『シンボル形式の哲学』(一) 岩波文庫 1989 p.357)

Middle Voice and 《Differentiation-Mediation》

Aki MORITA

College of Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2002)

Middle voice is one of the grammatical voices almost forgotten in our time. We try to understand its function to obtain another category in thinking. It will help us to study about the aesthetic experience.

Middle voice is used in describing the vision, the behavior, the mental event and so on. In studying such human activities, some authors mention middle voice.

In the situations where middle voice is needed, we find some function which concerns the 《between 1 and 2》, function of 《differentiation-mediation》.